

海上自衛隊・呉地方総監部及び第1術科学校を見学

～総務連絡会研修～

SJAC会員の有志会社で構成する総務連絡会（総務全般に関する連絡調整、相互協力及び親睦を目的とし現在12社が参加、事務局はSJAC総務部）では、航空機製品のユーザー運用状況等について見聞を得るため、各地の自衛隊基地等での研修を年2回行っている。平成28年度の第1回として6月中旬に実施した海上自衛隊・館山航空基地研修については本誌8月号に報告した。

2回目の研修は、去る11月10日～11日、8社8名及び事務局2名が参加して、広島県にある海上自衛隊・呉地方総監部及び江田島の第1術科学校を訪問した。

1. 第1日 呉地方総監部

午後1時半に呉駅前に集合し、駅から1km程離れた湾沿いにある呉地方総監部を訪問した。広報係 倉藤1曹の案内により、総監部庁舎および呉基地の艦艇を見学した。

呉には、海上自衛隊の組織の中で、呉地方隊と、自衛艦隊に属する第4護衛隊群及び第1潜水隊群などが配置されている。呉地方隊は、明治22年に開庁された呉鎮守府を母体とし、その警備担当区域は、瀬戸内海と、九州東岸から四国及び紀伊半島西岸に及ぶ地域の面する太平洋である。この区域の警備や災害派遣、自衛艦隊等の正面部隊への後方支援のほか、太平洋戦争中に米軍が投棄した機雷・爆弾を除去・処分して航路の安全を確保する掃海活動を行う。

地方総監部第1庁舎は、観光名所ともなっている明治40年建造の煉瓦造りの2階建て洋館である。研修参加者のうち代表4名が表敬を行い、呉総監 池 海将、総監部幕僚長 南 海将補に面会した。呉は海軍とともに築かれた街であり、今日の海上自衛隊に至るまで呉市の行政や市民と密接・良好な関係が続いている。横須賀、佐世保、舞鶴とともに旧海軍鎮守府の文化財が日本遺産に指定された

ことを受けた施設の一般公開や、艦艇ごとに独自のレシピを持つカレーを市内の飲食店で味わえる「呉海自カレー」イベントなど、観光資源づくりへの協力を積極的に行っている、といったお話をうかがった。

その後、呉基地の埠頭へ移動し、停泊中の護衛艦、訓練支援艦、潜水艦等、数々の艦艇の外観を眺めつつ、目指す掃海艇「あいしま」に乗り込んだ。

「あいしま」は基準排水量510トン、全長54メートル、乗員45名の艇であるが、磁気機雷に反応させない必要から鉄の使用を極力避け、船体は木材（松）とアルミ金具で、エンジンもアルミや青銅鋳物で造られている（最新艇の船体はFRP製になっている）。

まず、艇内の食堂にて、掃海部隊の組織、歴史や、機雷探知・処分の方法についての説明を受け、また、艦橋を見学した。掃海隊群は海上自衛隊・自衛艦隊25,000人の中の900人からなる専門部隊である。その中で呉に配置された第3掃海隊に属する掃海艇の1艇がこの「あいしま」である。

日本の掃海の歴史は1945年の終戦後から始まり、今日に至るまで、日本周辺の航路に米軍が投下した機雷や爆発物の掃討・処分を続

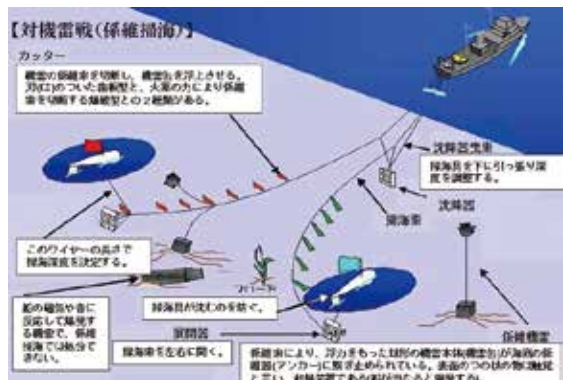
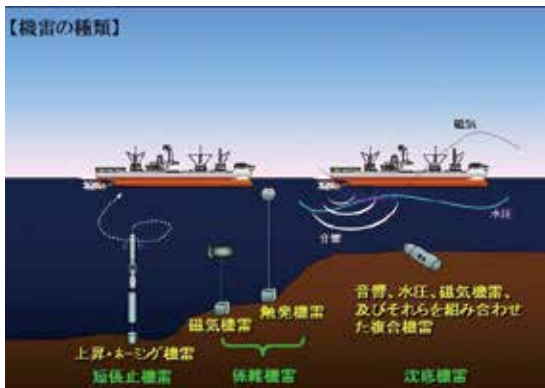
けている。ひとつの場所を1回掃海すれば済むわけではなく、海底の土に埋もれていた沈底機雷が後に現れることなどもあり、終わりのない任務とのことである。また国際要請による他国海域の掃海も行っており、朝鮮戦争における特別掃海隊派遣、湾岸戦争後1991年のペルシャ湾への海自掃海部隊派遣などがある。掃海活動はその性質から危険を伴い、1945年以来、15の艦艇が被害を受け、79人の隊員が殉職したとのことである。

機雷には、海底に沈められ通過する艦船の音、水圧、磁気に反応して爆発する沈底機雷や、海底の重しからワイヤーに繋がれて水中浮遊する係維機雷（磁気反応型と触発型がある）など各種の形式があるが、掃海艇には各種機雷に対応する装備が搭載されており、それらを「あいしま」の甲板上で見学した。

係維機雷に対しては、ワイヤーをカットする刃物を複数取り付けられた掃海索を掃海艇が曳航し、ワイヤーを断ち切って機雷を浮上させる。そして甲板上の20mm機関砲で狙い撃ち



掃海艇「あいしま」の前で



機雷の種類と処分の方法
防衛省HP、海上自衛隊・掃海隊群のページから引用



前部甲板 機雷処分用の20mm機関砲



機雷処分具 PAP104 MK5

する。沈底機雷に対しては、機雷処分具（遠隔操縦の無人潜航艇）を機雷に接近させ処分用爆雷を近傍に投下して爆破処分する。機雷処分具に取り付けたカッターで係維機雷のワイヤーをカットすることもある。また水中処分隊のダイバーが機雷近傍に潜水して処分作業を行うこともある。

式などが行われる建物で大正6年に建てられた。荘厳な石造りの床と高い天井が生み出す反響は約5秒も続くので、ゆっくりと話す内容に関わらず印象的な演説になるのだそうである。



水中処分員の装備の説明を受ける

「幹部候補生学校庁舎」（旧海軍兵学校生徒館 通称「赤レンガ」）は、術科学校の建造物の中でも最も著名であろう。東京・築地の海軍兵学校が明治21年に江田島に移転した当初、生徒は係留した学習船に起居していたが、明治26年に、築地・兵学校の生徒館と同じイギリス人の設計によるこの瀟洒な煉瓦造りの生徒館が完成した。煉瓦の大半がイギリスから運ばれたもので、現在の価値にすると1枚が1万円以上だったという。扉がないことが特徴の玄関ホールを挟んで、両翼にまっすぐ伸びる140mに及ぶ廊下、軍歌に詠われた「同期の桜」だという樹齢100年の桜などを見た。

2. 第2日 第1術科学校

明朝は、呉港からフェリーで江田島・小用港へ渡り、第1術科学校を訪問した。広報係長 端場1尉の案内で歴史的建造物の数々や、資料展示を見学した。

鉄骨煉瓦石造の「大講堂」は入校式、卒業

最後に、「教育参考館」に入館した。兵学校卒業生の積立金や一般企業からの寄付により昭和11年に建てられたギリシャ神殿風の鉄筋コンクリート造の資料展示館である。多数の遺品が収められた神聖な場所として、館内の撮影は禁止されている。館の中央部2階の、東郷平八郎、山本五十六、ホレーショ・ネル

ソンの遺髪が納められた聖殿に敬意を表したのち、順路に従って、端場1尉の説明を受けながら2階、1階の資料展示室を見学した。幕末の海軍創設期から始まって日本海軍史を物語る、将校や兵士の遺品、遺書、写真、絵画の数々が展示されている。東郷平八郎や山本五十六にかかわる展示物は特に数が多い。また、真珠湾攻撃やシドニー港攻撃における特殊潜航艇の働きを伝える資料展示は特徴的であり、館外には真珠湾で使われた潜航艇が展示されている。

明治から大正にかけて、西洋諸国に伍する

近代国家を目指して海軍力の強化を進めた過程における、諸将校、兵士の献身を示す展示物には、見る者に高揚感を与えるものがある。一方、太平洋戦争時の展示には、特攻隊員の遺書や、遺品、銘碑が並び、胸の痛む思いがした。ここに名前の刻まれた特攻隊員は、航空機による特攻だけでなく、特殊潜航艇での戦死者を含んでいる。

以上で、第1術科学校の見学を終え、昼食後、呉港へ戻り、呉市海事歴史科学館「大和ミュージアム」や、海上自衛隊呉史料館「てつのかじら館」を見学した。大和ミュージアムでは



大講堂の内部



旧海軍兵学校生徒館“赤レンガ”正面



教育参考館 外観



参考館屋外に展示された特殊潜航艇
真珠湾攻撃に参加した5艘のうちの1艘
昭和35年に米軍が引揚げたものを補修

戦艦大和建造など造船の街として発展してきた呉の歴史をたどり、てつのくじら館では、潜水艦の技術進歩や、また改めて掃海部隊の活動について知ることができた。

3. おわりに

6月の館山航空基地研修では、ソマリア沖の海賊対処行動などの海外派遣を含む、護衛艦搭載ヘリコプターによる海上防衛、救難活動について学んだが、今回は、航路の機雷除去によって戦後の日本復興を支えつつ国際貢献も果たしてきた掃海部隊の活動を知った。

これら各部隊の誇りを持った活動の根底には、旧海軍時代から、日本の近代化と国力強化のため、国際的視野を持って勇敢かつ献身的に任務を果たしてきた先人たちの精神が引き継がれていることが、呉・江田島で触れた数々の歴史的展示物から伝わってきた。今回の研修は、航空機の運用には直接関係しない内容ではあったが、我々業界のユーザーである海上自衛隊についての理解を深める大変良い機会だった。親切、丁寧な案内、説明をしていただいた呉地方総監部、第1術科学学校の皆様にこの場を借りて感謝の意を表したい。

〔(一社) 日本航空宇宙工業会 総務部部長 品川 貴〕